

第一話 ケニアの生活と水

堀江信之

私は三年あまりケニアにおりました。今日は『ケニアの生活と水』というテーマでお話をしたいと思います。

最初に私とケニアとの関わりのバック・グラウンドを簡単にお話します。私は、建設省の職員ですが、昭和六二年四月に外務省に出向、ナイロビにある在ケニア大使館に赴任しまして、三年間経済協力の仕事をしておりました。大使館の中に四人のスタッフからなる経済・協力班が設けてあり、ケニアを含めて五ヶ国に対する日本からの援助に関する事務に当たっています。私は無償資金協力と技術協力を担当しておりました。

さて、本題に入る前にケニアについて少し説明しておきたいと思えます。アフリカは大変大きい大陸です。中国とアメリカとヨーロッパをすっぽり収めてもまだ余るといふほどの面積があります。日本とアフリカは縁が薄いということもありまして、実際その大きさを実感する機会是一般に普通の人にはないと思うのですが、ともかく大変大きな大陸です。

ケニアはアフリカの東部に位置しており、国境線

をなぞりますと逆五角形の形をしています。アフリカは、一般的には大きく二つに分類されています。サハラ砂漠という非常に大きい砂漠がありますが、それから上の地域は基本的にアラブの世界になっています。アラブ、アフリカと言いまして、外務省でも中近東という扱いです。サハラ砂漠より下は、サブサハラ・アフリカと言います。別にブラック・アフリカと呼ばれることもあります。ここはもともと現地に住んでいる黒人の社会で、ざっと数えて四五ヶ国あります。その内の一つであるケニアは、面積にして日本の約一・五倍位あり、首都はナイロビです。ここは高度が千七百メートルほどの高地にあります。人口は推定で約百三、四十万人です。日本はアフリカの各国に大使館を置くほど金と人の余裕がないということで、隣接したソマリアとウガンダ、セイシェル島、それから少し南に飛んだ内陸国のマラウイ、以上四つの国とケニアを合わせた五ヶ国の経済協力をケニア大使館で担当することになっているわけです。

地形的には大サハラ砂漠、南部にもカラハリ砂漠があり、さらに大地溝帯、グレート・リフト・バレーと言いますが、があります。紅海からエチオピアを通過してビクトリア湖、それから湖が幾つか縦に細長く並んでいます。そこまで非常に大きな地球の

割目になっています。地殻変動もまだあり、また温泉等も出たりしています。地面がだんだん裂けていって、真ん中がぼこつと落ち込んだようになって、高さがだいたい数十メートルから数百メートル、幅がおよそ数十キロメートルから数百キロメートル。このような大きな地面の割目が走っているわけです。これがアフリカの地形の大きな特色です。ケニアの一番高い山はケニア山で、ほぼケニアの中央部に位置し、五二〇〇メートル位です。日本で一番有名なキリマンジャロは、アフリカで一番高い山ですが、ケニアとタンザニアにまたがってありまして、頂上はタンザニアに属しています。キリマンジャロ・コヒーという名前は、登録商標になっていまして、ケニアでとれたコヒーには使えないことになっています。ちなみにキリマンジャロは、五九〇〇メートル位です。ケニア山は、アフリカで二番目に高い山です。

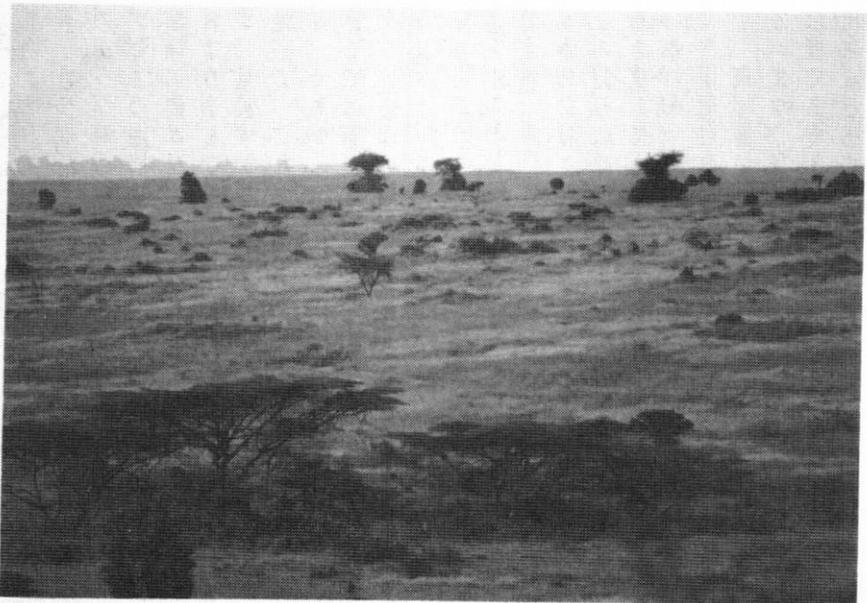
水を語る時には雨が問題になります。基本的にはアフリカは乾燥大陸だと言えらると思えます。通常の樹木が育つためには年間八百ミリメートル程度の降雨が必要だと言われていますが、この程度の雨が降る地域が大変少ない。ケニアでは可耕地、天水で農耕の可能な地域ですが、は大変少なく、二割程度しかありません。残り八割が乾燥地、半乾燥地になっ

ています。ケニアの分類では二五〇ミリメートル以下というのが、最も雨の少ないグレードですが、このような地域が国土の半分近くを占めている現状です。この地域は、ほとんど砂漠、土漠でありまして、植物の姿が全く見えないという状況にあります。それよりもしな地域はサバンナと言ひまして、草原です。見渡すかぎりの草原が延々と続いているという地形で、これが私達がケニアで一番よく見る風景です。それから一部の地域、特に高度の高い所ですが、そこでは雨が比較的よく降ります。極端な例ですが、ケニア山の中腹より少し上になりますと、三〇〇〇ミリメートルから四〇〇〇ミリメートルもの雨が降る年もあります。ただし山頂を取り巻く何十キロメートルかの範囲に限られています。例外的な地域ですが、八〇〇ミリメートル以上の雨が降る地域は、基本的にはケニアの西部、ビクトリア湖の周辺です。この辺りは標高千メートル以上ありまして、現地へ行きましても割合樹木が茂っており、場合によっては森になっています。この地域と先程言ひましたケニア山周辺の山麓地帯ですね。この二つの地域だけが、飛行機から見ますと、もっぱら緑の地域になっています。空から見て緑があると、私達はその地域は豊であると思ひます。何故かと言ひますと農耕が出来ると感ずるからです。このような地域が国土の

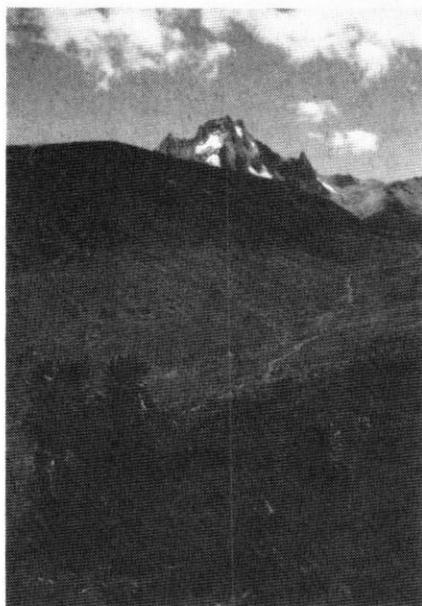
二割以下しかないという状況なんですな。

(ここでスライドによって現地の様子を少し見ていただきます。写真一、二、三)

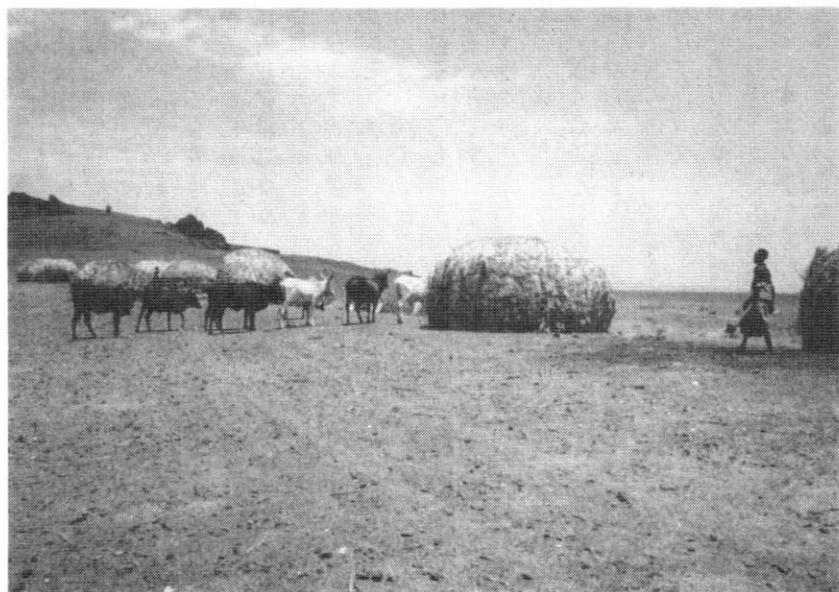
ケニアの一般的風景は、草原で所々に乾燥に強いアカシアの木が生えています。このような風景が視野の届く限り続いています。一年は雨季と乾季に分かれていて、雨季になると褐色一辺倒の大地が緑に変わり、国土の印象が一変します。これも国土全体から見れば限られた地域と言えます。ナイロビの第一印象はサバンナの中に忽然とビル群が現われるというものです。高層ビルもあり、ブラック・アフリカでは最大の都会と言ってもよいと思います。大地溝帯に沿って所々湖があり、動植物や鳥類の宝庫になっていきます。ナクル湖は、フラミンゴが二百万羽もいると言われています。遠くから見ますと湖の縁がピンク色に見えます。近付くとそれが鳥だと分かります。ケニア山の頂上は岩が尖っています。山頂に立つには優れたロック・クライミングの技術が必要です。日本では三五〇メートルと言え、とつくに森林限界を越えています。現地では一番緑の豊かなゾーンの少し上位というところ。ケニアという国名のいわれには色々あるようすが、イギリス人が初めてケニアに来て、ケニア山周辺の部族カンバ族に山頂に白く輝くものは何かと尋



写真一 1 サバンナの風景 (ナイロビ国立公園にて)



写真—2 ケニア山（標高3500m 付近から山頂を望む）



写真—3 北西部トルカナ地方にて

ねたところ、「ケニア」という答えが帰って来た。これが国名の語源だという説が有力です。「ケニア」というのは「白く輝くもの」という意味で、山頂の十字氷河をさしていると思われまゝ。タンザニアのキリマンジャロはスケールの大変大きい山です。山頂は氷河で、青白く輝いて綺麗です。

さてごく簡単にケニアの歴史を説明したいと思ひます。もともと人類が発祥したのはこの辺りだといふ説があります。約二百万年前と言われています。今ナイロビの博物館の館長から観光・野生生物省動物保護局の局長になられたリーキー氏のお父さん、この方がイギリスから来られて発掘を続けられ、二百万年前の人骨を発見されました。その骨があった谷がケニアから少しタンザニアに入った所にあります。その頃から人間が住んでいたわけですが、歴史的にはつきりしていませんのは、七世紀から八世紀にかけてアラブ人が交易の關係で海岸部からケニアにも入って来ました。アラブ人が現地人と交流するために生み出された言葉がスワヒリ語という言語です。その後十五、六世紀大航海時代になりヨーロッパの列強、ポルトガル等が入って来ます。そして十九世紀の末にイギリスが遂に自分の領土であると宣言し、その保護下に入ります。やがて独立運動が起り、アフリカの年と言われる一九六四年、他の幾つかの国

とともに独立をいたします。現在まだ独立後二十数年しか経っていません。そういう意味ではまだまだ非常に若い国だということが言えます。経済的にはブラック・アフリカ全てがそうなんです。非常に貧しいと言いますが、日本で言う貧しいという言葉ではとても表せない状況だと思います。途上国を議論する際に使われるGDP/人、つまり一人当りの国内総生産ですね、は三百ドル程度です。日本の場合約二万ドルですから収入がざっと百分の一強位になります。普通の人が肉體労働にありついて、一日勤くと大体三、四百円位貰えるという感じですよ。そういうレベルで比べる限りは全くお話にならない。ただそれでもブラック・アフリカの中ではケニアは裕福な方です。世銀が使っている分類でLICと云うのがあります。日本語では最貧国と言いますが、その分類よりは皮一枚上になっています。さらに貧しい国々が周りの国のほとんどです。だから周辺の国々から見ますと、ケニアは随分発展した国だと言われています。産業としては基本的に農業国です。ただブラック・アフリカの中では例外的に若干の工業があります。現在特に盛んなのは繊維工業、食品加工工業です。ちなみに自動車のノック・ダウン工場も一応ありまして、現地生産しています。日本車も組立てていますが、価格が大体日本の倍位になり

ます。それにエンジン・ルームを開けますと、心配になることもあるそうです。アフリカの中では自分達は工業国だと言っていますが、まだまだ発展すべき道程の大変長い国だと言えらると思ひます。日本との関係では、日本製品がかなり出回っています。ジャパンという国名よりは多分トヨタやソニーの方が知名度が高いと思ひます。田舎に行ってもトヨタと言えば、例えばフロントにトヨタと書いたランド・クルーザーが大々的に走っていますから。現地の人々にとつてはトヨタの車にただ乗せてもらうだけでも憧れという感じですか。そういう意味では日本との関係がありますが、大半の人達はジャパンは中国のどの部分かという位です。私達がアフリカのある国がどこに位置するかという事を当てるのが難しいように、彼等もアジアは地球の反対側位にあるらしいが、日本という製品はよく見るがどこにあるのか分らない、それに日本人とは話した事もない、そういう所です。ですから国としての日本には馴染みがない。製品を通じて若干馴染みがあるというのも、ここ五年ないし十年のことです。少なくともイギリスの支配下にあった二十五年以前には日本という国が存在していることも知らなかった状況だと思ひます。もう一つの繋がりとしては、現在最も援助の額が大きい国が実は日本なんです。ついこの間ま

ではアメリカ、それよりもっと前はイギリスですが、そういう国から援助が流入していたわけですが、現時点では何故か東方の極めて遠い国である日本が単純に金額だけという援助額第一位になっています。さて、ケニアの人々の生活ですが、先程お話ししましたように貨幣経済で見る限り大変貧しいと言えます。ケニアのもう一つの特徴は人口増加率が大変高いことです。約四パーセントと言われていますが、これは一部の小さい国は除きまして一定レベル以上の国では最高の伸率です。通常一人の女性が子供を生む数が大体七人であります。但しその内の何人かは小さい時にすぐに亡くなつてしまひますが、一部の地域では乳幼児死亡率が二十三パーセント。つまり乳離れをするまでに四人に一人は死んでしまふわけです。一番の原因は、安全な水が無いことです。アフリカという所はデータを取るのが大変難しい所です。電話は地方に行けばありません。地方の主要都市間は一応電話がありますが、大変かかり難く、雨が降るとよく不通になります。道路も雨季は悲惨なものです。日本では最近四輪駆動が流行っていますが、舗装道路に必要な理由が分かりません。ところがケニアでは雨季、道路が泥沼になるわけです。乾季ならガタガタ道でも一応一時間で行ける所が、雨季ですと泥沼をお尻を振りながら、人間が所々押

しながら、また川が増水しておれば減水するまで一日二日待ちながら行くわけです。とにかくデータを集めるといことが大変難しい。かつ集めてもあまりあてにならない。それに数字をやり取り出来る人が大変少ない。それでもサンプリング調査で集めた数値が、先程の乳児死亡率二十三パーセントという値です。もちろん推定値です。大変な努力によって得られた貴重な推定値なんです。死亡原因の最大のもは、日本で言えば単なる下痢なんです。現地の人と水との関わりについて極端な話をしますと、一生生涯水という形態の水とはほとんど関わり無く、触れずに暮らすという人達もいます。特にマサイ族は牛を追ってサバンナを移動しつつ生涯を終える部族ですが、彼等が生活する場には水と言えぬものは無いというのが最も的確だと思えます。もちろん雨季になれば水溜まりは出来ませんが、乾季は三ヶ月四月雨が一滴も降らない、雲さえ見ないというのが通常の大乾季なのです。朝起きると彼等は牛の首の所に傷を付け、器で血を受けます。朝食は、この血に牛のミルクを混ぜて飲みます。これが標準的な朝食です。マサイ族は勇敢で、何時も槍を持ちこわい顔をしていますので、一緒に暮らしたことがありません。だから実際の生活は詳しくは知らないのですが、人から聞きますと今言ったような生活をしています。

お風呂等は彼等にとっては何れも出来ないでしょう。水を浴びることは、ある言い方をすれば非常に贅沢な事なのです。だから近付くと臭いがしても当然です。乾季になると、大体の中小河川は枯れ川になってしまいます。場所によっては何メートルか掘ると水が出て来ることがあります。でも乾季に一定量の水を手に入れることは大変難しいことです。特にケニアの大半を占める乾燥地、半乾燥地ではそういう状況にあります。マサイ族はごく一部の部族でありまして、ケニアには五十二部族があると言われていきます。だからマサイはケニアの代表的な部族というわけではありません。一番大きい部族はキクユ族で、大体二十パーセント位、完全に農耕部族です。通常の農耕の部族では、水汲みが主婦の仕事になっています。場合によれば五キロから十キロ位離れた川、井戸があれば井戸に、その日の分、あるいは二、三日分の水を汲みに行くのが一日の労働のうち最大の労働になっていく所がかなりあります。川は日本の川とイメージがかなり違います。アフリカの土はラテライトと言いまして、赤土の非常に細かい土なんです。そこで川は赤茶けた泥川なんです。そこへ行って水を汲んでくるわけですが、瓶に一杯の水で一日ないし二日家族が暮らすという所が大半だと思います。ここで家族はともかく大家族なんです。最近

人口増加率が落ちて、子供が七人になったのですが、各援助国が家族計画に相当な援助をした結果、この十年間で子供の数が一人減ったという状態なんです。でもこれは、私達援助関係者にとつては画期的なことなんです。これまではずっと増え続けていたのですから。援助によつて母子衛生の知識が若干普及したり、医薬品が地方にも少し入るようになった結果、平均寿命がぐんぐん伸びています。今までは子供が自然淘汰されていたのが、そうでなくなつた。これが人口増加率四パーセントに表われていると思えます。それから婚姻関係が複雑な部族が多く、一部の部族では一夫多妻制になっています。それに結婚外の子供が結構います。だから大変な大家族で何十人というのもあります。一人のお父さんの下にお母さんが三人、それぞれに子供が七、八人づつ、それからお父さんに職があつたり、ある程度の農地がある。それを頼つて親戚が集まつて来ます。こんな大家族に必要な水をどうして汲んで来るかということはお母さん達にとつては大変な問題です。そういうことで、地域によつて、また部族によつて生活パターンが相当違います。当然水との関わりも違つて来ます。極端なのは先程言いましたマサイのように、水という形態の水とはほとんど縁がなく暮らしている人達です。それからナイロビの一部の都市生活者

には、私達と同じように水道のタップを開ければ水が出て来ます。ちなみに、ナイロビは水に關しては非常に恵まれてきます。断水というのが、ここしばらくは年に数回しかありません。通常アフリカの水道というのは、蛇口を開けますと茶色い水が出て来るのが当り前です。お風呂をはつて底が見えるどびどびするといふ位の事が多いのです。ところがナイロビでは、世銀あるいは日本が結構水道に援助資金を投入していることもありまして、細菌学的にはマイナスといふことで、もちろん硬度の問題がありますが、普通の人はそのまま飲める位です。ブラック・アフリカでは、極めて例外的に水の良い所です。もともとナイロビは、イギリスがウガンダに向けて鉄道を敷設していた時の中継駅として造つた町なんです。最初は駅が一つあつただけなんです。乾燥地帯から高度が上がつて行つて、ちょうど多雨地帯に入つた所にあるわけです。ですから水にはある程度恵まれてきます。ナイロビといふ言葉はマサイ族の言葉では「冷たい水」を意味しているくらいです。結果的に日本人と衛生觀念が全く違つて来ます。御飯の前に手を洗ふことなど全然考えられません。油ぎつた手でいろいろな食べ物に素手でつかんで食べています。場合によつては私達にも勧めてくれる

のですが、ちよつと食べる気がしません。地方に出張した時にはホテル等ありませんから、彼等の作った料理を食べるのですが、どうやって作っているのかと言うと、先進国から輸入した金物の洗面器に肉や野菜を放り込んで塩を入れ火にかけるだけなんです。その洗面器を洗う水がないので、何度でも使っているわけです。基本的に私達は地方に出張した時は、料理を作っている所をなるべく見ない、これが地方でやっていく秘訣だと思えます。一応火が通っておれば大丈夫だろうということで、肉も冷蔵庫などありません。電気がありませんから、かんかん照りの暑い所にしばらくほってあつた肉なのです。彼等は肉が好きで、美味しい料理とは肉が沢山入っていることだけなんです、味はあまり関係ないんですね。そこで、沢山肉を入れて出してくれるのですが、駄目ですね。それに、日本の肉がいかに柔らかかつたかということが改めて実感されました。ともかくその肉は、いくら噛んでも形状が変わらないのです。少し話が脱線しましたが、ともかく水で物を洗う、体を洗うという觀念が全然違うということが先ず言えます。つくづく日本人というのは、生活のありとあらゆる場で水というものが出て来る、朝起きてから寝るまで本当に水に接することが出来る非常に恵まれた民族というか、風土というか、そういうよう

に感じます。ちなみに、施設として水道や下水道がどうなっているかと言いますと、これもまた先程と同様、統計というものが推計にすぎないのですが、一応政府の発表によりますと、水道の普及率三十五年計画というのを作っていました、五年毎に社会資本を整備して行こうという計画です。この計画では次の五箇年で何パーセントにするかという、目標は何と六十パーセント。私達からすれば、こんな事は有り得ないという数値です。先ず人口が四パーセント増えていますので、同じ普及率を保つことが大変なことです。かつての日本の都市でも大変だったと思うのですが、人口がどんどん増えスラムが拡大して行くと、水道の普及率を上昇させることは極めて困難なことなんです。国家財政に関してはお寒い限りでありまして、先ず税金を取れる人達がほとんどいないのです。地方税というものが基本的にありません。地方に行くと、貨幣経済とは全く関係なく暮らしている人達が結構います。そういう人達からはもちろん税金はとれないわけです。お金を毎日見る人達の中でも税金を払える人はほとんどいないのです。必然的にどうなるかと言うと、外国企業や現地に興ってきている地元企業から法人税を徴収するということ、それから物品の相当部分が輸入され

ますので、輸入品に税金をかけるということ、これが国税の中心とならざるを得ません。ちなみにケニアの国家財政の規模は日本円に換算して約五千億円程度。これはブラック・アフリカの国々の中では相当豊かな国と言うことが出来ます。但しこの中には援助資金が入っています。特に投資的経費といわれるものは、相当部分援助資金であるということが出来ます。逆に言うと、援助がなければ、新たな社会資本の整備はほとんど何も出来ません。下水道については残念ながらはつきりした統計がありません。推定される場所では数パーセント、あるいはそれ以下ということが出来ます。私達の概念でいう下水道があるというのは、一つはナイロビです。特に中心部はイギリスの時代から整備されている施設がありますので、一応あります。地方でも人口が数万以上の都市では、いわゆる近代下水道が少なくとも一部分をカバーしています。ただしそのほとんどが、あるいは全部が完全にオーバー・フローしているのです。通常、設備能力の二倍三倍の下水を受け入れていきます。ですから処理水の水质は推して知るべしという状況にあります。

水に関する中央省庁の関係ですが、ケニアは大統領制をとっており、大統領府が一番上にあります。その下に三十数省あります。ケニアでは毎年のよう

に新しい省が出来ていきますので、ころころ変わります。ですから正確な直近の政府機構を把握することは難しいのですが、水資源省というのがあって、一番中心的な役割を果たしています。この省の最大の眼目は、国民全てに安全な水を供給しようということとです。同時に下水道と洪水をカバーすることになっていきます。但しこれらについては殆ど手が回っていないという状況です。この省以外で水に関係するのは、農業省とエネルギー・地域開発省です。一つ面白い制度として特色あるものですが、ケニアの河川流域別に開発公社というものがあって、そこが大きいプロジェクトを主管するようになっていきます。例えば多目的ダムを造るような場合、このような流域別の開発公社が担当することになっていきます。現実にはケニアの五十万平方キロの国土がどうなっているかと言いますと、大きくは五つの水系で成り立っています。先ず北エワソ・ンジロ川、これはケニア山の北麓の水を集めて東に流れて行きます。ところがこの北東部はケニアで最も乾燥した地域となっており、途中で砂漠の中に消えてしまいます。次はタナ川、延長七百キロほどで、ケニア最大の川です。ケニア山の東麓の水を集め、インド洋に注ぎ込みます。水量が最も豊で、年中枯れることはありません。この川に沿ってかなりの数の多目的ダムがあり、現

在も一つ建設中です。それからアーティ川、南部の幾つかの低い山々の水を集めてインド洋に注ぎます。タナ川とアーティ川は、例外的に一つの開発公社が両方を担当しています。中西部では北のトゥルカナ湖に入る川が幾つかあります。この湖は若干塩分の入った塩湖です。それから南のタンザニアに入っていく南エワソ・ンジロ川。これら二つの川がグレート・リフト・バレーのケニア側にありますので、一つの地域と扱い公社を設置しています。最後はビクトリア湖の流域です。この地域はケニアでも最も雨量が多く、人口も四十パーセント居住しています。ここにLBD A、ビクトリア湖流域開発公社というのがあります。これら五つの流域別に国土を開発して行こうという構想がありまして、これらの公社がエネルギー・地域開発省の傘下に入っています。水資源省の現在の最大の活動は水道ですが、ナイロビ市は特別市ですから自分自身で水道・下水道事業を行っています。それ以外の全ての都市の水道・下水道は水資源省が設けることになっています。但し財源的に非常に制約がありますので、整備の速度は遅々たるものです。基本的には水資源省が各援助国から援助を受け、都市では都市型水道、地方では専ら井戸あるいは溜池を設けて水道を整備しています。現実には各援助国が得意な地域というか、ある種の

住み分けのようなことをしています。例えばビクトリア湖周辺の中都市はドイツ、農村はフィンランド、というように得意とする地域を中心に援助していくようになっていきます。

都市型水道ですと、急速汚過が一番多い方式になります。緩速汚過は現実には限られています。その次に出て来るのは井戸になります。これも近代的なドリルで行う井戸掘り技術がアフリカの人達には難しいのですが、ケニアではロータリー式のドリルを十二台持っています。そのうちの四台は日本から贈られたものです。浅い所で通常数十メートル、深い所で百五十メートル位掘ります。成功率はざっと半分位です。二本に一本は水が出ますが、一本は空といるのが平均的な成果です。付近の人達が一時間あるいは二時間で歩いて行ける間隔で井戸を掘って行こうとしているわけですが、この広い国土の中に井戸掘り用の機械が十二台しかないのですから、大変な引っぱりだこで、膨大な要望書が水資源省の担当のデスクには積み上げられています。実際問題として、政治的に強い所が優先されることもあるようです。実際、交通や通信手段が不便で、かつ故障しても部品の調達が困難、しかも石油の確保が難しい、なおかつ外貨が貴重ときていますから、作業の進度が極めて遅いわけです。外貨の割り当ては年に何回

か行われます。中央政府が会議を開いて膨大な要請の中から対象を選ぶわけです。そのために要請してから割り当てが決まるまでに相当の期間がかかる。それから部品を発注しても輸入ですから、海外から港に入るまでに時間がかかり、港の荷役の設備が悪いのでまたまた時間がかかる。こんな訳で途方もなく時間がかかり、効率が極めて悪いわけです。それでも、日本の四台の設備で月に各一本位は掘っています。個人的には、彼等は随分頑張っているという印象を持っています。

ところで文化という言葉に関して現地に居て感じたことですが、全く個人的な感想ですが、向こうで暮らしていると、人間の非常にストリートなものにしょっちゅう突き当たります。人間の生き方が大変むき出しだなと感ずることが、ままあります。逆に言いますと、日本人の喜しや考え方は非常にソフィステイトされていると思います。但し根本は同じだと思えます。その表われ方は、向うは非常にむき出しです。日本の場合はソフィステイトされている。例えれば向うでも民主的な選挙が行われます。小選挙区制で代議士が選ばれ、それから直接投票で大統領選挙が行われます。これは実際は信任投票なんです。投票の仕方は、候補者の写真を貼ったプラカードが村役場に何本か出まして、自分の支持するプラ

カードの前に並ぶというのが、向うに於ける選挙の仕方なんです。日本のように時計を睨みながら一分刻みに行動している人達ではありませんので、選挙は何月何日何時、場所はどこと指定しても決まった時刻にきちっとは出来ません。例えば一時と決まっていたても夕方までかかってしまいます。そこで実際の候補者あるいはある党の支持者は何をやるかといえますと、ある村役場で並んだ人達のカウントが終ると、トラックでその人達を乗せて別の投票所につれて行くのだそうです。それが大変ストリートに出て来るわけです。巧妙に分からないようにオブラートに包んで行われるということはない。根本の発想は同じだと思えます。

日本に戻って感じたことが幾つかあります。一つは日本の家に入ったとたん、ガリバーにでもなったような気持ちで、ここは小人の国かと思いました。部屋が小さく頭がつかえそうなんです。洗面台も低い。それからある面では豊か、何でもあつて当たり前。それが心底染み就いている。向うでまず引越ぎの時に言われる言葉が「何時でもあると思うな、水、電気、電話」。水はあるときに汲んでおく、電話はいつでも繋がるとは限らない、電気も何時切れるか分からない。日本にいますと、そういう心配は全くありません。それから日本人は非常に頑張る民

族だということを改めて感じました。向うで先ずぶつかる問題は、向うの人のやる気のなさです。日本人専門家は最初三月、怒りまくりです。そもそも頼まれて技術を教えにいったのに、教わろうとする人が自分の所に全く来ないわけです。向うの人にしてみると、どこか分らない遠い国から人が来て、何かやっているとらしいという程度の話なんです。朝オフィスに来ると相変わらずべちゃくちゃ喋っているわけです。君達何故働かないのだと尋ねると、何故そんなに働く必要があるのだと言うのです。水資源省は、国民に水を供給するのが仕事だろうと言うと、自分だけ頑張っても仕方無いと答える始末。そして一々もつともらしい答えが返って来ます。そして二、三ヶ月経って、そもそも自分は何をしに来たのかと大使館にみえるわけです。そこで、専門家の任期は二年ですから、その任期の中で何か一つ現地の役に立つことをして、それから二人でも三人でもやる気になる人を作れば十分なんだと言っわけです。ある面でなぐさめ、ある面で勵ますわけですね。何回かこれを繰り返すのが常になっていきます。彼等は別に頑張らなくてもいいわけですね。また頑張ってもどうしようもない事が多いのです。雨が降ればぬかるんで、どう頑張ってもどこにも出られないのです。洪水になれば、自分達がどうしようが大河は家を流

して行くわけです。毎年ビクトリア湖は、雨季が終ると二、三メートル水位が上がって、付近が二、三ヶ月水につかります。これは何をどうしても、この季節になれば水が上がって来る。大自然があまりに大きく、人間があまりに小さいのです。それにそんなに頑張らずとも食って行ける。これも一面では正しいのです。日本人は十人おれば八人、九人、自分が属している組織のためにということだけを夜、酒を飲んだ時にさえ考えている非常に貴重な民族で、構造協議をしると言って来るのも当然だと思っわけです。

最後に日本人について感じたことは、やはり純粹培養の民族だということですが、向うで議論をしようと思ひますと、先ず地球は丸いか、という所から始めなければならぬ。日本では当り前の所が本當に当り前かどうかという点に、時間を相當費やさねばならないわけですが、日本では前提の所に延々と時間をかけるという点がほとんどない。ともかく日本人は皆同じ様な事を考えています。逆に一步海外に出ると相手の気持ちに充分わからないのでないか。発想がそもそも全然違ふ人達のことをどうやっても考えようがない。日本人にはそのような面があるような気がします。だから純粹培養の良さもありませんが、また大變弱い面もあると思ひます。これからは

欠点の部分を変えて行かねばならないと思います。以上が日本に戻って二ヶ月の心境です。限られた経験の中で、もしかすると一面的かもしれない私の話は、この程度にして、質問にお答えしたいと思います。

討議論

須田 森林が伐採されるなど緑が失われて行く問題が世界的にあります。ケニアではどうなんですか。

堀江 ケニアの森林面積は、わずかに三パーセントと言われています。日本ではアフリカというトヤングルとか密林というイメージが強いと思いますが、密林があるのは実際は中央部あるいは西部のコンゴ河の流域の一部にしか過ぎません。大半はサバナ的な草原なんです。木があってもばらばらという状況です。森林面積はかなりの速度で減っているというのが共通認識です。原因は、燃料が薪なんです。石油や電気に接することが出来るのは、ごく一部の人間に過ぎません。だから一般の人は薪に依存しているわけです。人口は増え続けていますし、生活水準も少しづつ良くなっています。だから薪への依存度は高くなっています。主婦の労働は、水汲みとともに薪拾いです。子供も薪拾いですね。日本

も援助で育苗センターを作っていますが、現地の人達に苗を植える動機付けを与えるのが大変なんです。フィンランドが全国の森林拡大マスタープランづくりの調査費を援助することにしましたが、具体的にどうするかは完全に試行錯誤でしょう。日本からも一昨年、植林のボランティアの人達が来ていますが、普通のやり方では苗が育つ所ではないのです。樹木が育つための雨量がある地域は約二十パーセント。その地域も相当部分が農地になっています。だからほんの僅かしか森林が残っています。今までは、膨大な手間暇が掛かります。この面で今一番進んでいるのは多分フランスで、サハラ砂漠で実験しています。

須田 私のエゴですが、地球的規模で考えるとアフリカには森林があつて酸素を供給したり生態系を維持するのに役立って欲しい。ところが生活のためには森林を伐採したり、プランテーションを作ったりしなければならぬ。我々が望む事と現地の生活との間に調和が取れるかどうかという点について私は悲観的に思うのですが、向うにおられてどのように感じられましたか。

堀江 端的に言うところ、どうしてよいのか分からないということ。とにかくありとあらゆる事が

問題で、それも途方もなくどえらい問題ばかりなんです。いろいろな事をやってみて、行き着いた所は、人口がこんなに増加したのでは何をやってもどうしようもないという感じ。对症下药はいろいろやっているわけですが、全ての問題は人口の急増に収斂して行くわけです。それで私個人としては人口問題に一番力を注ぐ事になりました。でもあまりに大きい問題で、暖簾に腕押しという感じ。アメリカは二十年この問題を手掛け、毎年膨大なお金を掛けています。この成果かどうか、子供の数が八人から七人になったというので、涙を流さんばかりに喜んでいました。ともかく現地ではいろいろな試みがなされようとしています。遠くに離れた日本に住んでいる人間が何をすべきかをもし考えれば、まずそういう状況を知って何をすべきかを考える人を増やすべきだと思います。日本人は直ぐに対応して直ぐに忘れる民族だと思います。白人は論理的に突き詰めて来ます。日本人は感情的に「かわいそうだ」という事で終ってしまう傾向があります。これでは本当の意味での貢献はあまり出来ません。

北川 私は、発展途上国の自立のための援助は気の遠くなるような仕事だという印象を受けました。自立には風土を背景として国民の意識というものが大事だと思うのですが、義務教育に対する援助、そ

れから義務教育の内容はどうなっていますか。

堀江 ケニアは、現在独立後最大の教育改革の真っ最中にあります。新しく八四四制を導入しようとしています。小学校八年、中学校四年、それから四年のカレッジあるいはユニバーシティです。その前は七二三四制でした。最初の八年の部分を義務教育にしようということで、従来から一応は義務教育費用は国家負担ということが建て前でやってきました。実際問題小学校の入学者は沢山います。但し卒業する人が極めて少ない。理由は、公立学校の学費はただなんです。制服を買う必要があるわけです。制服のない子は来るなということで、形式的なんです。それで入ったものの一学期を終えられない子供が相当数出るわけです。一学期に払わねばならないお金が七千円ほど。これはお父さんが職にありついている人の一月の月給に相当します。入学時にいろいろ費用がかかりますから、ともかく入っても出ることが難しいという現実です。教育は英語で行おうとしています。彼等が生まれてからまず話す言葉は部族語です。少し学のある人はスワヒリ語、これは共通語です。タンザニア、ケニア、ウガンダの共通語ですね。ケニアはある意味で賢明な選択、ある意味で不幸を招いているのですが、英語で教育しようとしています。良い点は政府の文書はすべて英語な

のです。ですから援助を依頼したりする時は良いでしよう。他国と付き合う時にも良い。でも大変な混乱が学校に入ると起こるわけです。部族語かスワヒリ語で生活していたのですから。

小学校に対する援助要請は、日本大使館には膨大にまいます。校舎を建てるための援助と、留学の便宜を図って欲しい、この二点が最も多い要請です。毎日のようにまいます。

政府が最も力を注いでいるのは実は大学教育なんです。概してアフリカ各国の政府と話をして、議論が出来る人が本場に少ないのです。いわんや、今後の国の経済運営をいかにすべきかという点を議論出来る人がほとんどいない。世銀やIMFが相手国政府と国政レベルの政策議論に行っても議論にならなくては大変な。そこで幾つかの国際機関等が相談して、経済専門学校を作ろうということになりました。ともかく一部のエリートを作らないと国として成り立たない、こういう状況にあるわけです。彼等の第一希望は、先ず国としての体裁を整えたいという事です。ケニアには以前からナイロビ大学というイギリスの作った大学がありますが、この四年間で大学を三つ増やしました。だから今全国に四つ大学があるわけです。日本が設けたジョモケニアツア農工大学というのは単科大学ですが、これを五つ目の

総合大学にしたいという動きがあります。政府の資金が大学に相当程度注がれているというのが現状です。一九八七年で小学校が一萬四千校、総学生数が五百万人と一応データ上はなっています。ケニアの人口は二千二百万人、小学校に五百万人いる。小学校には行ける人が行ける時に行くという事です。だから年齢構成に大きい幅があるわけで、日本とは全く異なります。日本の方が例外なんです。大学でも同じで、若い人は十七才から入りますが、一般には大学は一度社会に出て、それから入るとい考えが普通です。日本は、小学校の援助を現在はいしません。要請が膨大で、どこから手を付けて良いのかわからない。それに効果が分からないわけです。それから他の国々も援助をしても規模が小さいのです。アメリカも大学への援助が中心です。

岡久人 下水道が普及していないわけですが、それではどのように排水しているのでしょうか。それからケニアに援助が集中しているように思うのですが、何故なのでしょう。

堀江 先ず下水道の質問ですが、大半の家にはトイレがありません。家というのは、単に夜露をしのご場なのです。部族により地域により、作り方は違いますが、一番多いのは木と葉で丸い円筒型に草葺きの屋根を乗せる、これが地方部では一番多い形

あれだけの援助が継続してケニアに流入したということだと思えます。しかし北欧のように人道主義に立ち、公平に援助している国々もあります。

須沢 藤 水使用量が少ないということですが、その水をどのような事に使っているのでしょうか。

堀川 江 まず飲み水ですね。物を洗うというのは、あまり習慣的ではないのです。洗濯については矛盾する話ですが、ある面で大変綺麗な所があります。洗濯に対する水需要はかなりあります。水はあまり浴びないのですが、オモという地元の洗剤がありません。清潔にしたいという願望は強いようです。実際に水がどのように使われているのかという点はよく分からないのですが、食器は洗わなくても平気ですが、洗剤の需要は伸びています。机や椅子を拭くのに水を使っているという場面はほとんど見ませんでした。水洗トイレには縁が無いのは勿論です。衣服等は比較的小綺麗にしています。手近に水がある地域ほどそうだと言えるようです。

西 昭野 ケニアは、一党体制で指導者はイギリスで教育を受けた人達だと思えます。この体制がしばらく続くのか、それとも民主化して行くのか。またエリート連の国家に対する使命観ほどの程度のものか。現在と将来の政治的な問題点についてお聞きし

たいと思えます。

堀川 江 大使館には政務班があり、私は担当しなかつたので詳しくは分かりません。政党はカヌーというもの一つだけです。独立時に戦った人達が作った政党です。独立当初この党の党首ケニヤツタが大統領に就任しました。現在はモイという元副大統領が昇格して大統領になっています。政治と行政が一体になってカヌーを民衆に浸透させる工作を進めています。役人もカヌーのマークである鶏のマークを付けていないと大成しないとされています。党が最高決定機関のようになっていて、私も抵抗感を持ちました。カヌーは国民に黨員になることを勧めています。ある程度の社会的地位の人達は少くとも表面的にはこぞって党に入り、大統領を称えます。しかし一歩中に入るといろいろな事を言う人はいません。

ブラック・アフリカの国々では政権がクーデターで倒れる事が多い。彼等にとってクーデターは大事件ではないらしい。政権が腐敗しはじめたとなると軍部が立ち上がります。最近ではトップが傭兵を雇って身辺を守るようになっていきます。ところがケニアは現状では安定しているようです。これは現大統領が巧妙に反対派を押さえているからだと言われています。それから西側諸国が応援していることも大きいと思えます。本当の民主国家になることが最終

の道だと思つてゐるのですが、そのための混乱を恐れてゐます。ともかく国が若く、しかも西側諸国の都合で人為的に作られた国家だと言えらると思ひます。本来的に一つの国でない所を一つの国家として保たねばならないわけです。ですから初期段階ではかなりの強権がないと纏まって行かないと言へるでしょう。国家が解体しない程度に強権を保ちつつ最大限民主的であること、その調和を模索してゐるわけです。日本の場合には、このような政治的な問題は前面に出してゐません。

吉岡 自田 ナイロビ等の都市では下水道があるとの事でした。どのような処理をしてゐるのか。それから食生活はどんなものか、以上二点についてお教え下さい。

田嶋 江 ナイロビには三つ大きい処理場があります。全て広義の活性汚泥法です。私の見たのでは四番目の都市ナクルの二ヶ所の処理場では散水戸床法とポンド。ポンドの前に腐敗槽があります。それぞれ全部計画能力の倍以上の下水が入つてゐます。

特色があると思ふのは、ナクルです。流入下水の濃度が何とBODで五百ppm。理由は水使用量が非常に少ない。水道の計画原単位が一人二〇リットル。これは農村部ですが、都市部では五〇リットル。必然的に濃くなるのだらうと思ひます。散水戸床の

方はモーターが盗まれて、稼働してゐません。ともかく泥棒市場では何でも売つてゐます。余程頑丈な鍵でもかけない限り、どんなものでも盗まれる可能性があります。モーターは貴重品ですからなおさらです。私の見るところでは、現実的には腐敗槽を設け、その後にはポンドを付けるのが妥当です。維持管理が簡単ですから。ただ面積が広く必要なのは問題ですが。

食料問題ですが、ケニアは珍しく食料自給国なんです。ケニアは今まで内戦がありませんでした。それに援助が豊富です。このために食料が自給出来るようになったわけです。飢餓の最大の要因は内戦です。比較的恵まれた国だと言へます。

中村 少し話が戻りますが、泥水が飲料水として使えるのかどうか。また糞尿の始末はどうしてゐるのでしょうか。それから地方自治体の仕組みはどうなつてゐるのか、また彼等の宗教について教えて下さい。

田嶋 江 私が驚いた事は泥水を飲むということですよ。ある入植地で十年程前、日本が援助して作った千人規模の急速戸過の浄水場があるのですが、現地女性が取水口の所で濁つた水を飲んでゐる光景を見て、大変ショックを受けた記憶があります。大変皮肉な光景でしたね。地元の人達は瀧すことをせず、

泥水をそのまま飲んでいきます。牛が隣で飲んでいる同じ水をそのまま飲んでいきますね。胃腸の強さが少し違うのでしよう。その代わり下痢の発生率は高い。抵抗力のない小さい子供は脱水症状というだけで死んで行きます。安全な水が地方部にあれば、死亡率は半減するでしよう。でもコレラや疫病が出ててもニュースにもなりません。

糞尿の始末ですが、基本的に彼等は屋外で生活しています。だから何事も自然に始末されているという事だと思えます。大小便は、必要を感じたときに適当な場所ですて、それでおしまいという事です。草原がほとんどで、糞尿の始末で困っているという話は聞きません。

部族と自治体の関係ですが、県が確か四十一に分かれています。概ね県と部族が対応しています。ただ大きい部族は複数の県にまたがっており、小さい部族は複数で一つの県という形になっています。キクユ族は五ないし六の県にまたがっていますね。

宗教についてはイギリス時代にかなりキリスト教を広めています。約半数がキリスト教徒です。一割位がアラブの影響でモスリム、残りの人々は土着の部族神ですね。それぞれの部族でタブーがあり、神様がいます。

「渡辺 迎」 ナイロビは、歴史のある都市なのか、そ

れとも新たに作られた都市なのか、その辺りはどうですか。

「堀江」 ナイロビはもともとマサイ族等が走り回っている草原だったわけです。イギリス人が十九世紀に入ってきて、まず目を付けた所は、ウガンダだったと言われています。ビクトリア湖周辺は雨が多く、従って緑も豊です。ですからケニアは通過地点にしか過ぎなかった。そこでウガンダまで鉄道を引こうと決心したわけです。原住民を使い、監督にインド人を当てて、工事を始めます。ナイロビはその途中駅として作られたわけです。まだ百年経つか経たないかの都市です。ナイロビより下は乾季になると真つ茶色になる乾燥地帯、上は緑が出て来ます。ちようど境界に当たるわけです。マサイ語で「冷たい水」を意味するわけですが、境界地点という意味で要衝の地なんでしょうね。最初は駅がぼつんとあつただけでしたが、今は推定人口百四十万人、スラムが各所にあります。その人口は誰にも分かりません。定職のある人は一割位。一番の娯楽は映画で、一日の給料の三、四分の一度のお金で見ることが出来ます。日本円で百円位ですね。信じられない密度で寝ています。私の赴任中に脳髄膜炎が流行して大騒動になったことがあります。この前まで自然の谷だった所にみるみる堀つ建て小屋が出来、巨大な

スラムになつた所があります。ナイロビの現状はこんな所でしょうか。

公口 日本あるいは日本人がケニアから学ぶことがあるとすれば何でしょうか。

堀江 はつきり言つてめげない、悩まないこと。これは日本人の及ぶ所ではないでしょう。どうしてこの人達は、こんなに明るい顔が出来るのかと思つた事が何回もあります。一日なにも食べてなくても音楽が鳴れば、喜んで踊つていられるかもしれない。明日がどうなるか、日本人なら、思つてみても仕方が無いと思つても悩むでしょう。

それから発想が先入観が全然無いことです。とらわれることなく何でもなんとかしてしまふんです。自分の発想の狭さを知らされるのがしよつちゅうありました。固定観念にとらわれない良さですね。西木田 雨季と乾季があるわけですが、雨季の雨を使う発想、あるいは洪水の水を使う発想がないのか。それからアフリカの子供を救うための街頭募金が時々行われていますが、あれの信ぴょう性はどんなものでしょうか。

堀江 雨は年によつて変動が激しく、ここ数年は毎年異常気象だと言われています。大雨季は三月の中下旬から六月の初めまで、それから曇りの日が七月末まで続きます。この期間がケニアの冬です。

小雨季は十一月です。雨の降り方は、熱帯的なスタイルが多いようです。

雨水そのものの利用は基本的にはあまり行われていません。最近援助としては、溜池を何キロか到一个の割で作るようになっていきます。これは主に遊牧民のためですね。それから一種の地下ダムです。赤茶けた細かいラテライトですから、水がよく溜まるわけです。溜池では蒸発のために膨大な水資源が失われます。そこで地下ダムにしてしまおうというわけです。最近幾つか試行的に作られています。地元の家屋で屋根に降つた雨水を瓶に溜めようとしている所は何箇所かで見ることがあります。

募金の話ですが、民間のボランティア的なものは実態がつかめないので。日本人は、飢餓を救うという募金に例えば百円入れるとそれで終り、良いことをしたというわけです。白人は、百円入れると、それがどうなつたかを真剣にフォローします。日本のチャリティーと白人のそれとの違う点の一つですね。いちがいに言うとな怒られるかもしれませんが。石丸 衛生状態ですが、ゴミがどうなっているか、それから蠅や蚊ですね。さらに宗教に関して墓地はあるのか、日常食は何か、最後にケニアの文学作品があるのか、以上の諸点について知りたいと思います。

堀江 先ずゴミですが、ナイロビは今ゴミで埋まっています。ナイロビでは都市的生活が定着しています。ゴミ収集車もありますが、残念ながら使いこなせません。これには技術の点もありますが、故障した場合の様々な問題があります。そこで一般に機械の稼働率が大変低い。それに減価償却という概念がありません。そこで市長は公的には面倒見られないというので、民間会社に免許を与えて高級住宅街等のゴミ処理を有料でやらせることにしました。ここ二、三年大繁盛ですね。

蚊と蠅は大問題です。蚊ではハマダラカがマラリアを媒介します。ケニア人は一説によると数千パーセントはマラリア持ちだということです。蠅ではツエツエバエが恐ろしいわけです。アフリカ眠り病を媒介します。しかし、衛生問題としての蚊や蠅を問題にすることはあまりありません。それ以前の問題が大きすぎるわけです。

墓地は、キリスト教の墓地以外見たことがありません。部族によって葬式の仕方がかなり違うと聞いています。

食事はトウモロコシが主食です。粉に挽いたものを煮て食べています。団子のようにしたものに野菜や肉を添えて、いわば日本の寿司のようにして食べるわけですね。但しこれを三食食べられる人はそんな

なにも多くありません。一番多いバターンは、一日二食です。朝食は紅茶で代わりにします。お金のある人は牛乳、もつとお金のある人は砂糖を入れます。夕食は、先程のものにスクマという野菜を塩で煮たものを併せて食べます。スクマは、キャベツとホウレン草の中間のような野菜です。金があればこれに肉が少し付きます。お祝い事がある時は山羊を絞めて、皆で食べます。

芸術に関しては西アフリカに優れたものがあるようですが、東アフリカにはあまりありません。文学ではグギという作家がヨーロッパで何かの作品を出しているようですが、詳しくは分かりません。

日十田 私の研究所では年三、四回ODA関連で何日か指導して来るという仕事をしています。趣旨はいいのですが、実際問題としては三、四日しか滞在しないわけです。物見遊山という観もあるわけですが。ケニア等ではこの程度でどんな役に立つものなのでしょうか。

堀江 率直に言って業務の妨げとなるのは一週間以下の調査団です。何かやろうとすれば二、三週間には必要です。一週間でレポートを書くことは出来ませんね。日本ではアフリカに関する専門家が非常に少ない。インフラの優先順位を決める事等は必要だと思いました。資本が限られていますから、この

問題が重要だと思ひます。ともかく信じられぬ程の小額の資金なんですから、最も効果的に使わねばならないんです。そのためにもじっくり腰を落ち着けて仕事をやる事が不可欠です。何日単位なんてとんでもない事ですね。ある程度深く広く分かっている方に、少なくとも数箇月単位でいて欲しいという事です。そして現場にも行つて欲しいですね。国の意見と住民の意見は必ずしも一致しません。これは日本でもあると思ひますが、この点が難しいですね。その国のスペシャリストを育てる必要があります。

中西西 下水処理の専門家はケニアには行つていませんか。

堀江 いません。水道の専門家が下水道の仕事をやる羽目になっていましたね。狭い分野の純粹な専門家では勤まりません。ありとあらゆる実務的な問題が持ち込まれます。

笹相場 朝日新聞六月十九日号（一九九〇年）の朝刊に「ケニアの地方都市でも住宅難」という記事が載っていました。上下水道費が家の価格の三分の一を占めるとあります。考えられない現実があるようです。その事がお話を聞かせてもらつて、それなりに分かつたような気がします。

それにしては人生観が変わるような経験をされたわけで、羨ましい気持ちです。

（完）